

斎藤徳元 五回

伊藤浩睦

松永貞徳は、俳諧を「職業俳諧師にとって客である町人階級に楽しんでもらうための易しい言語遊戯」だと考えていました。そのため、語呂合わせや駄洒落、付け筋の変化で笑いを取ることに重点を置き、それが客への目配りなのだという感覚でした。

それに対して、賦物俳諧や源氏俳諧をやっていた斎藤徳元は、客である町人階級に合わせるよりも自身の知識や技巧を示すことに関心があったようです。しかし、宮様や公家や大名との交際であればそれで良かったのですが、一般の人からは敷居が高い俳人と見られていたようです。

貞門派の中で別格の長老として崇められていても、俳諧の一門は大きくなりませんでした。孤高の俳人になっていたとも言えます。

発句 京田舎ことばの花の幾めぐり 貞徳

脇句 育ちがらこそ訛れうぐひす 徳元

第三 蝶の舞誰を師匠に習ふらん 未得

貞徳の発句は、俳諧は言葉の花で、言葉で各地を巡って行くとしています。徳元の脇句は、今は作られなくなった七七の十四文字の句です。京田舎を受けて、田舎の鶯は訛れとして、気品の高い発句を意図的に落として笑いを作っています。この受け答えが当時の俳諧の面白さであり、脇句を付けなくなった近代俳句では味わうことができないものとなっています。第三を詠んでいる未得は石田未得で、当時はよく知られた俳人でした。この頃に行われていた俳諧の雰囲気を知ることが出来ます。

徳元の句を幾つか紹介しましょう。

雲払ふあらしや月の鏡とき

嵐が雲を払い、月の鏡を研いでいったようだとしています。見立てに滑稽観がある句です。

大木はゆるがてたつや春の松

「江戸元旦試毫」と句の上に書かれていて、江戸へ下ったあとの元旦の句と分かります。大木の揺るがぬ姿を新年の寿ぎとしています。

唐までもさんごの月の光哉

句の上に、「八月十五日天下にまうけの君御産後の此なりければ」との書き込みがあります。「まうけの君」は、儲けの君であり、この場合は八月十五日に將軍家に跡取りの子どもが生まれたとの意味になります。八月十五日は中秋の名月です。「さんごの月」は、三五で十五を示すと共に産後に掛けていて、唐を出すことにより、外国まで若君誕生の光が及んでいるとの祝言になっています。

何歌も扇にかけば折句かな

どんな歌でも扇に書けば折り畳むという意味と、言葉を折りこんで詠む「折句」が掛けてあります。

降雨にこよひの月やぬれ鼠

「八月十五日雨天に」と書き込みがされています。雨月のことを言っています。雲の上にあって濡れるはずのない月が、ぬれ鼠になるとの表現で読み手の笑いを誘う句です。

鹿舞もせよやはたんの花み酒

「鹿舞」と漢字で書いてあるので、獅子舞ではなく鹿舞なのです。花見酒は桜が普通ですが、あえて異なる物の取り合わせで違和感を出して笑いにしています。